Osaka University Knowledge Archive

Title	寄居歌談における詩論の影響について
Author(s)	宇佐美, 喜三八
Citation	語文. 1953, 9, p. 14-23
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68429
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

寄居歌談における詩論の影響について

宇佐美喜三八

一

近藤芳樹の「寄居歌談（がうなのうたがたり）」は、和歌に関する随筆集であつて、幕末期に現れた歌学書の中で、一応注意を惹くものといひ得るであらう。今この小論においては、「寄居歌談」に見られる芳樹の歌論に、漢詩論と交渉を持つもののあることを明かにしようとするのであるが、最初に同書の成立について少し考へておきたいと思ふ。

「寄居歌談」には「天保の十あまり三とせといふとしの冬」に誌し了つた旨の自序があり、また巻一の終りには天保十三年の霜月に、巻二の終りには天保十四年の神無月に、それぞれ書き卒へたといふ識語を附してゐる。然し、巻三・四・五の各巻には、それらの成立年月などを示す識語がなく、自序は巻二の識語から考へても、巻一を書き終つた時に誌したものと看做さなければならない。従つて著者の識語のみから見れば、成立に関しては、「日本歌学史」に註する如く、「天保十三年後成」といふより他はないのである。「日本文学大辞典」に「天保十三四年に成つた事は序や奥書によつて知られる」といふのは、巻一及び巻二に関する限り言ひ得ることであつて、巻三以下の成立時期については、それらの内容を吟味して、別に考へなければならないであらう。その点に留意して本文を見た場合、先づ巻三の次の記事は当然問題となるものである。

巻二に覚性法親王の出観集を引て、定家家隆の骨髄をとり給へる、とかけるを宍戸真澂見て、この法親王は、両卿よりも先輩かとおぼゆるを、かくいはるゝは事たがへるやうなりといぶかりしを、なほざりに聞すぐしおきたりけるに、この頃諸平がもとよりも、文のたよりにそのよし告おこせたり。

これによれば、巻二が一先づ成立して読者を得た後に、巻三が成立したことが想像せられる。ところが「寄居歌談」は全五巻となる前に、弘化二乙巳歳の奥附を貼つた巻三までの刊本が出てをり、その巻二に附した芳樹の著述目録には、「寄居歌談」の条に「初編一冊既刻、二編一冊嗣出」とあつて、内容紹介の文中に「とし毎に一冊あて出来侍るなり」と書かれ、奥附には「寄居歌談　三編　嗣出」と見えてゐる。また各巻の題簽の巻次の数字の下には、巻一に「壬寅」、巻二に「癸卯」、巻三に「甲辰」と干支が記されてゐるが、壬寅は天保十三年、癸卯は同十四年、甲辰はその翌弘化元年で、それらの干支が夫々の巻の成立した年代を示すことは、巻一・二の識語と比べても明かである。これから観て巻三は弘化元年に成

立し、また巻三までは逐次刊行せられたことが知られ、巻三に巻二の読者の言が記されてゐる問題も解決できるであろう。弘化二年版は巻三が成つて既刊の二冊を加へ、三冊一揃にしたものであつた。巻四・五は、その後かなりの年月を隔てて成立したことが推定せられる。巻四を見ると、加納諸平の死を悼んでゐる文があつて、その中で

……みまかりしこそ、あたらしくかなしきかぎりなりしか。

と述べてをり、成立は諸平の歿した安政四年六月より後であることが知られる。更にまた巻五を見ると、黒沢翁満の「藐姑射祕言」に関する話がある。翁満は安政六年四月に歿したが、「藐姑射祕言」は巻末の語の中に「安政六年といふ年の秋」とあつて、翁満の歿後何人かが手を加へて広めたものらしい。「寄居歌談」の記事は、翁満の死後「藐姑射祕言」が世に広まつてから暫く後に書いたもののやうに思はれ、早くても安政七年即ち万延元年に成つたものと見るべきである。巻五の成立はそれによつて安政七年よりも後であることが考へられる。なほ注意せられるのは、巻二に、

江戸には聞ゆるうたよみいと多かるよしなれど、おのれいまだものせぬ所なれば、書おこする人もをさ〳〵なし。

とあつて、天保十四年頃に芳樹は未だ江戸に下つたことはないと言つてゐるのであるが、巻四には、

おのれ江戸なる麻生の屋形にひととせゐて、国にかへらんとせし時、……

とあり、巻五には、

今はむかし江戸にありけるころ、岡部春平がもとに、竹芝の里にたづね行けるに、……

と見えることである。「寄居歌談」五巻が刊行されたのは元治元年（一八六四）甲子で、巻一が成立してから二十二年後、諸平の歿後七年、「藐姑射祕言」の識語が書かれた後五年に当る。巻五は恐らく、元治元年に近い頃書かれたものであらう。「歌書綜覧」の解説は精確を缺く所があり、巻四・巻五について、「明治十六年に上木す」とあるのは、明治十六年求版とある後摺本に拠つたものと思はれる。なほ巻四に、小林歌城の所から巻二に引いた千種有功の歌に関して異見を言つてよこしたとあるのは、前に述べたやうに、巻三までが先に刊行せられてゐたことによるのである。

要するに「寄居歌談」五巻は、長い歳月にわたつて成立したもので、巻三までの成つた時と、巻四・巻五の成つた時との間には、二十年に近い年月の隔りのあることを、以上によつてもほぼ知ることができる。二十年といふ歳月は、人の一生の上から見れば決して短いものではない。芳樹その人の魂や学問は、その間に何らかの発展を遂げてゐた筈である。巻の三までを書いた頃の芳樹と、巻四・巻五の筆を執つた頃の芳樹とは、同じ芳樹でなかつたことが考へられる。このことは詩論が「寄居歌談」の中の歌論に与へた影響を探る際にも、まさに顧みなければならぬ問題となるであらう。

二

「寄居歌談」の内容を見ると、巻一は三十七条、巻二は三十六条、巻三は二十七条、巻四は三十二条、巻五は三十四条、合計百六十六条の随筆的記事が、一定の組織もなく並んでゐる。それらはいづれも広い意味で和歌と関係のある論説、考証、随想、聞書の類であつて、芳樹の歌に対する見解はその中に散見するのである。芳樹

の歌論には個性的な鮮かな主張はなく、全篇を統一する一貫した歌学思想も求め難いのであるが、「寄居歌談」にも注意すべき言説の見られることは、夙に歌学史家の指摘する所である。然し、今それらの指摘せられた歌論のみを吟味しても、詩論に拠つたもののあることが知られ、芳樹の卓見と看なされてゐる所説にも、必ずしも創見とはしがたい例の存することが明かとなる。次に先づその問題に関して述べようと思ふ。

芳樹が中国の詩話に拠り、その出典を挙げて述べてゐる記事に、明の李于鱗に関する話がある。即ち巻三において、李于鱗が田舎の出身で作詩の際に入声の文字を平声に使つて笑はれたことを恥ぢ、舌の先を嚙み切つて血を酒にまじへて飲んで、再びこの誤りを犯すことがあれば尽く舌を嚙み切らうと盟つた結果、詩の姿がよくなつて、遂に王李二家と並び称せられるに至つたといふ話を述べ、「この事謝肇淛が詩話に見ゆ」といつてゐる。芳樹はこれを例として、同じ唐土の内においてもかくの如くであるから、まして「この邦の人のかなたの詩をまねぶは、まことに労して功すくなくやあらん」といひ、日本人が漢詩を作ることは、「なほいとかたきわざにこそ」と説いてゐるのである。謝肇淛（謝在杭）は明の人で、「五雑俎」の著者であるが、その詩話といふのは「小草斎詩話」を指したものである。「小草齊詩話」はわが国では稀観の書であつたらしく、天保二年に明刊本と思はれる林読耕斎の旧蔵本を読耕斎の蔵書印や蠹蝕の跡まで入れて摹刻した本が刊行せられた。芳樹もその摹刻本を読んだものに相違ない。この詩話は「荘子」の体裁に倣つて、内篇と外篇（上・下）とより成り、右の李于鱗に関する話は、外篇上の李于鱗のことを述べた中に、

于鱗初作レ詩。尚操二齊音一。以レ入為レ平。江左諸君有二竊笑レ之者一。時方飲酒。即齧レ舌血滴二杯中一。并呑レ之曰。後再犯者。当二尽割二我舌一。自レ是一変。無二復纖毫齟齬一。噫前輩苦心如レ此今之人能彷二彿其万一一耶。

とあるのに拠つてゐる。原典の話は李于鱗を褒めて、その苦心談を録し、以て後輩を戒めたものであつた。芳樹はその話を例に借りて、日本人の作詩の困難さを説いたのである。芳樹の説く所はすでに貝原益軒も「慎思録」や「文訓」などに説いてをり、しかもこの場合、芳樹は益軒とは異なつて、和歌のことには少しも触れてゐない。結局、「寄居歌談」に論ずる所は新鮮味のあるものではなく、「小草斎詩話」の話を例に挙げてゐる点に創意が見られるに過ぎないのである。しかも芳樹自身は中国の詩話に基づいたこの僅かな創意に、恃む所があつたのではないかと思はれる。さうした態度は、「寄居歌談」の記事から屢ば感じられるのである。

然し右の記事は、芳樹が「小草斎詩話」を読んだといふことを、事実として確認させるのであつて、芳樹の和歌に関する見解の中には、その詩話に見える所論と交渉を持つものがあるか否かといふ問題を改めて新しく提起するであらう。そこでその問題について吟味すると、同じく「寄居歌談」の巻三にある和歌の喜怒哀楽説は、「小草斎詩話」の一節を、そのまま翻案したものであることが明かになるのである。芳樹は和歌に関して次のやうに論じてゐる。

歌とは人のみるもの聞ものにつけて、あはれとおぼゆる心のおもひを、口にあらはしいふこゑなり。その声に四つの別あり。君よりつかさ位たまはれるをりによみ、おやのいのち長きをことぶきてよみ、のどかなる日、さかりににほふ花にむかひてよ

めるなどは、よろこびのこゑなり。防人となりてつくしのはてに年へたる、いくさびとにさゝれて、越路の雪におきふししたるなどやうのをりによめらんは、怒のこえなり。露をかたしきて月ばかりまち出たる暁、やどりをもとめわびたる旅の空のゆふぐれなどのは、かなしみのこゑなり。友どち、おもふことなくて酒くみかはしたるみなみおもて、家つがすべきをのこ設けたるうぶ屋などにてよめるは、楽しみのこゑなり。しかはあれど喜怒哀楽ともに、あまりその心をつくし過せば、ほどを越えたるえせ歌になりて、中々にいやしくつたなく聞ゆるものなり。たとへば詩のことを孔子のあげつらひて、関雎楽而不レ淫哀而不レ傷とのたまへるも、かの詩のほどにかなへるをほめ給へるものなるべし。歌に於ても関雎あめれば、古歌を師とたのまんにも、撰集の中をよく〳〵えらびて用ふべきことなりかし。

この論は従来歌学史を説く学者たちによつて、注意すべき歌論であると言はれてゐるのであるが、決して芳樹の創見ではない。実は「小草斎詩話」内篇に見える、次の詩論を歌論に翻案したものに他ならないのである。

詩者人心之感二於物一而成レ声也。風払レ樹則天籟鳴。水激レ石則飛湍咽。夫以二天地無心木石無情一。一遇二感触一。猶有二自然之音響節奏一。而況於レ人乎。故感二於聚会眺賞美景良辰一。則有二喜声一。感二於羈旅幽憤辺塞殺伐一。則有二怒声一。感二於流離喪乱悼亡弔古一。則有二哀声一。感二於名就功成祝頌燕饗一。則有二楽声一。此四者正声也。其感レ之也無心。其過レ之不レ期至。其発二於情一而出二諸口一也。不レ知二其所一以然一而然。（中略）然非レ約レ之以二音律一。閑レ之以二法度一。其蔽且二流蕩放軼一而不レ可レ止。故曰。関雎楽而不レ淫。哀而不レ傷。夫詩三百篇。聖人独挙二関雎一為レ訓。則其他之任レ情而過レ則者多矣。（下略）

両者を対照すれば、「寄居歌談」の説が「小草斎詩話」に拠つてゐることには、疑問を挟む餘地がないと考へる。和歌における自然説や人情説を推し進めて、これらを微分したやうな歌論は、一応注意を惹くのであるが、すでに詩論の翻案であることを認める以上、芳樹の功はむしろ翻案の巧拙に係はる問題となるのである。この事実はまた「寄居歌談」に見える注意すべき歌論を、芳樹の新見と見なすことについて、人々に反省を促すものともなるであらう。

「寄居歌談」巻四には、叙景歌と抒情歌とについて論じ、歌は情をむねとすべきであるといふ思想を述べた次の文がある。

景はいひやすく情はのべがたし。景は目にふれて前にあり。情は心よりおこる。前にあるものは既にあるによりいひやすく、心よりおこるものは、とみにはおこらぬゆゑにのべがたし。然はあれど、それはたうまれつきの性のちかきかたありて、人麿定家の情にながく、赤人家隆の景にながきたぐひ、ひたむきには定めがたけれど、情をむねとするが歌のほいなれば、赤人よりは人麿、家隆よりは定家のかた、なほ一きざみ上にたたれしなるべし。

叙景歌は詠み易いが、抒情歌が和歌の本然的なものであるとして、人麿・定家と赤人・家隆との優劣論に及んだこの簡潔な一条は、「寄居歌談」の中では出色の歌論であるやうに思はれ、歌学史家はまたこれをも注意すべきものとしてゐる。然しこの歌論も、清の袁枚の「随園詩話」巻六に見える次の詩論を、そのまま歌論に翻案したものである。

凡作レ詩。写レ景易。言レ情難。何也。景従レ外来。目之所レ触。留レ心便得。情従レ心出。非有二一種芬芳悱惻之懐一。便不レ能二哀感頑艶一。然亦各人性之所レ近。杜甫長二于言レ情。太白不レ能也。永叔長二于言レ情。子瞻不レ能也。王介甫・曾子固偶作二小歌詞一。読者笑倒。亦天性少レ情故也。

芳樹が「随園詩話」の文によつて論を立ててゐることは明白であらう。「寄居歌談」の文には、原拠の翻訳ともいふべき言葉が見られる。さうして原文の杜甫と永叔（欧陽修）とは人麿・定家に、太白と子瞻（蘇東坡）とは赤人・家隆に改められてゐるのである。原文で王介甫（王安石）や曾子固の小歌詞のことを言つてゐるのは、要するに詩は性情を詠むべきものであることを主張するためであつた。「随園詩話」の著者袁枚は、詩論史における性霊派を代表する人で、詩は性情に基づくべきことを極力唱道した。「寄居歌談」を通覧すると、常識的な態度ではあるが、芳樹も和歌の性情説を唱へてゐるのであつて、右の一条の歌論は、袁枚の詩論を巧みに換骨奪胎したものといふことができるのである。

「随園詩話」は補遺の十巻を合はせて、全二十六巻の浩瀚な詩話である。清の乾隆壬子（五十七年）春板に刻まれ、それから十三年後のわが文化元年には、神谷東溪により和刻の抄本六冊が刊行せられた。先引の文は和刻本にも入つてゐるもので、芳樹は和刻本に拠つたのかも知れない。然しいづれの本であるにせよ、芳樹が「随園詩話」を見たものとすれば、更に一つの問題が生ずるのである。

「寄居歌談」巻一に、

人のいひやすくおもはん事をば、われはみだりにいはじといましめ、人のいひがてにくるしむ事をば、われはたやすくいはんと心がくべし。これ上手の境にいたらんはしだてなり。

といふ文があつて、作歌の修練上の注意が述べられてゐる。然るに右の文は、宋の姜白石の「白石道人詩説」にある

人所レ易レ言。我寡言レ之。人所レ難レ言。我易言レ之。自不レ俗。

といふ文を翻訳したやうなものである。この白石の詩説は「詩人玉屑」巻一の詩法にも掲げられ、また「随園詩話」巻四にも、「姜白石云」として引かれてゐる。（但し随園詩話では文末の「自不俗」が「詩便不俗」となつてゐる）。「白石道人詩説」は数多い宋代の詩話の中で、「滄浪詩話」と並び称せられる名著であつて、伊藤仁斎もこれにより「和歌四種高妙序」（古学先生文集巻一所載）を書いたのであつた。右の白石の文も和刻本の「随園詩話」に入つてゐるが、芳樹が「白石道人詩説」に拠つたのか、それとも「随園詩話」に拠つたのかは決し難い。「寄居歌談」の叙景歌と抒情歌との論が「随園詩話」の文に拠つてゐることは事実であるとしても、それは巻四に見えるもので、この白石の詩説に拠つた文は巻一の始めの方に見られ、最初に述べたやうに、巻一と巻四とは長年月を隔てて書かれたことが認められるのであるから、巻四をもつて直ちに巻一を推すことは、或は真相を誤る恐れがないとも限らない。然し「寄居歌談」には、これ以外に「白石道人詩説」に拠つた文はないやうに思はれるので、「随園詩話」に拠つたのではないかと、一応推測することは差支へがないのである。

「随園詩話」の内容は、他の多くの詩話の著と同様に、詩を中心とした随筆様式であるが、身辺雑記的な記事や他人との贈答の詩などが夥しく見られ、当時の詩壇の姿が知られる所に新鮮味をもつてゐる。塘宅山は和刻本「甌北詩話」の題辞の中で、中国における詩

話の様式の変遷を略述した後に、「要之。随筆詩話。惟宋人為富元明諸儒。有著録者。亦唯沿襲。無別呈面目者焉。近時袁子才著随園詩話。巻帙洪繁。而所載同時来往酬酢者居多。是乃詩話之体小変矣」と言つて、「随園詩話」の特異性を指摘してゐるのである。「寄居歌談」の内容は、様式の上でも「随園詩話」と通ずる所が見られる。「日本歌学史」に「寄居歌談」を解説した中に、「当時の歌壇の好史料」とすべきものとあるのは、芳樹と同時代の歌人やそれらの人の歌に関する記事が多いからであつて、その傾向は特に「随園詩話」と類似の趣が著しいのである。和刻本の「随園詩話」は文化十三年に再摺本が出てゐるのを見ても、清詩流行時代に入つて、ひとしほ世に迎へられたのであらうと思はれる。菊池五山の「五山堂詩話」大窪詩仏の「詩聖堂詩話」小畑行簡の「詩山堂詩話」などは、いづれも「随園詩話」の体裁に倣つて、幕末期に現れた邦人の詩話である。「寄居歌談」は恐らく「随園詩話」或は「五山堂詩話」等の体裁に暗示を得て書かれたものであらう。なほまた上記の例のやうに翻訳的関係を指摘することはできなくても、「寄居歌談」の記事の中には、「随園詩話」に拠つたのではないかと考へさせるものを見るのであるが、慎重を期して、今ここに挙げることは省略したい。

三

「寄居歌談」の歌論には右のやうに詩論を翻案したものがある一方、和歌を論ずるのに漢詩や詩評を引用したものが見られる。もとより漢詩文が引かれてゐるといふこと自体は、敢へて異とするに足りない現象であるが、それらが芳樹の和歌に対する見解に関係をもつ点に問題が存するのである。巻四には、

陶淵明が鎮軍参軍といふ官たりしとき、望雲懸高鳥、臨水愧遊魚とつくれる句を、鶴林ろうじて、士豈能長守山林。長親蓑笠。但居市朝軒冕。時要使山林蓑笠之念不忘為勝耳。淵明此句似此胸襟。豈為外栄所点染哉。山谷曰。佩玉而心若槁木。立朝意在東山。即此意。といへる。この評いとをかし。

といつて、定家の「もゝしきのとのべを出る宵々にまたでぞむかふ山のはの月」を淵明の詩と比較して論じてゐる。淵明の詩も定家の歌も共に山林蓑笠の思ひがあるもので、淵明は澆季の逸民であり、定家は聖代の世臣であつたが故に、詠じ方に相違があると説き、最後に「詩と歌とおもぶきの同じきものもまゝあれども、おのづから其のかはりめは、さすがにあるものなれば、よくかんがへてさたすべき事なり」と述べてゐる。「鶴林ろうじて」の次の漢文は、宋の羅大経の「鶴林玉露」人集巻五にある「不忘山林」と題する文を抄出して継ぎ合はせたもので、原文は「所点染哉」の次に、王荊公が相を拝するの日壁間に題した詩のことを言つて、その後に山谷の評語を記したものであつた。芳樹は「鶴林玉露」の詩論を主にして、定家の歌を比較論評したのであつて、結末の詩歌の比較に関する語は、彼自身が反省して自ら戒めるべき注意を述べてゐるかの如くにも思はれる。

また巻五には、かつて江戸にゐた頃、岡部春平が詠んだ「うちしめり霧ほのくらきあけぼのに花のかまよふ庭の秋はぎ」といふ歌を示され、萩に香があることを承認しなかつたが、「古今集」に「春雨ににほへる色もあかなくに香さへなつかし山吹の花」とあるのを

見ると、「かやうにとりなすも歌のふぜい」であるから、萩の香を詠んだのも「何のとがむべきこと」があらうかと述べて、更に

今詩別裁に、柴炤炳詩、春陰桑葉白、出暖柳花香。桑葉非白、柳花無レ香。然古語云、杏花盛桑葉白。太白云、風吹二柳花一満店香。詩人引用、皆有レ所レ本。といへるを見れば、からうたのれいはたかゝるをや。

と論じてゐる。（柴炤炳は、柴紹炳、出暖は日暖の誤であらう）。「今詩別裁」といふのは、清の沈德潛纂評の「欽定国朝詩別裁集」を指したもので、右の詩と評とは同書巻八に収められた柴紹炳の五言律詩「酬毘陵劉慶雲湖上見贈」に関するものである。「春陰桑葉白、日暖柳花香」はその詩の頸聯の句であり、「桑葉非白」以下の文は、編纂者の加へた評である。芳樹は和歌の趣向に関する意見を述べようとしたのであるが、「古今集」の歌の外に漢詩や詩評を引合に出して、彼の結論を重からしめようしてゐることが考へられる。

同じく巻五に、黒沢翁満の著であるといふので、「藐姑射祕言」を歌書と誤つた人の話を記してゐる。「藐姑射祕言」は好事家の間で、「あなをかし」・「逸著聞集」と共に三大奇書と呼ばれるもので、芳樹の言葉を借りれば、「いとみだりがはしう、さとびたる男をんなのみそかごとを、物がたりぶみめかしてかける」書物である。芳樹はそのやうな書を作つて後人を惑はした翁満を責め、「源氏物語」についてさへ作者紫式部の魂の浮ばないことを言つた場合があると述べて、

また白楽天が、さしも唐の世のすぐれ人なりしすら、長恨哥、琵琶行などの、えんなるふみつくれるによりて、淫言媟語入二人肌骨一。纖艶不逞。非二壯士雅人所レ為とそしられたれば、まして黒沢ばかりの人をや。

と非難を加へてゐる。右の白楽天に対する評は牡牧の謂つたもので、「新唐書」巻百十九の白居易伝の中にも見え、また「詩人玉屑」巻十六にも引かれてゐるものである。但し「新唐書」によつて記すと、

纖艶不逞。非二壯士雅人所レ為。流二伝人間一子父女母交口教授。淫言媟語入二人肌骨一不レ可レ去。

とあつて、芳樹は何に拠つて述べたのか明かでないにしても、右の詩評の語を用ひてゐることは言ふまでもない。この例において芳樹は和歌を論じてゐるのではなく、歌人を戒めてゐるのであるが、やはり前例と同様に、中国の書に見える詩評を引用して、彼の所論に重きを加へようとしてゐるのである。

右の「藐姑射祕言」についての論には、当時の教養階級の人らしい道德感情が見られるのであるが、芳樹の歌論には、文学の用を軽視しない儒学者風の匂ひの感じられる場合があつて、それが漢詩や詩評と結びついて現れてゐるやうに思はれる。同じく巻五には、松平定信の歌を数首掲げて、これらは皆いたづらに花鳥に戯れ、風月に耽つた歌ではないと述べた上、

説詩晬語に、王子擊好二晨風一而慈父感悟。裴安祖講二鹿鳴一而兄弟同食。周盤誦二汝墳一而為レ親從証。此三詩別有レ旨也。而触発乃在二君臣父子兄弟一。唯其可二以興一也。読二前人詩一而但求二訓詁一猟二得詞章一。記問之富而已。雖レ多奚為。といへる如く、まことに少将のよみ給へるは、たゞ詞章（アヤコトバ）を猟得（トリエテイ）たまへるのみならぬ、いたりふかきことのはなるをあぢはひ知るべし、かの古今集の袖ひぢて結びし水の云々をすして、ともたちのたがへる中

をなほしたるたぐひ、ふるくもあれば、うたよまん人、つねにこの心おきてをわするべからず。

と論じてゐる。「袖ひぢて」の歌で友達の仲違ひを直したといふのは、室鳩巣の「駿臺雑話」巻一にも見える、織田備後守の家老平手中務に関する話を指すのであらうが、ここに於いて、芳樹は和歌の功利性を認めてゐると謂はなければならない。「説詩晬語」はこれまた沈徳潜の詩話で、右の引用文はその巻上に見える。同書の冒頭においても、「詩之為レ道。可下以理二性情一。善二倫物一。感二鬼神一。設二教邦国一。応二対諸侯一。用如レ此其重也。云々」と、詩教の重んずべきことが説かれてゐて、沈徳潜の詩論に、道徳を以て詩を律しようとする道学臭のあることは、すでに指摘せられてゐる所である。(青木博士著「清代文学評論史」第六章参照)。芳樹の引用した沈徳潜の文には明かに道学的思想が見られ、芳樹はそれに共鳴した態度で、その詩論に基づいて和歌を眺めてゐるのを注意すべきであらう。

右の例は巻五の終りに近い所に見えるものであるが、文学に功利性を認める思想は、芳樹が早くから抱いてゐた所であつたやうに思はれる。巻二には広瀬淡窓の「読徒然草詩」を歎賞した記事がある。芳樹の挙げてゐる淡窓の詩といふのは、「遠思楼詩鈔」初篇の開巻第一にある「読徒然草六首」の中の第一首目で、「花はさかりに月はくまなきをのみ見るものかは」といふ文の思想を詠んだ五言排律である。その詩の終りに「吾告二学レ詩者一。斯語即妙詮。開元豈不レ美。中晩勿二相捐一」とあるが、これについて勝間田盛稔が、

兼好がことばを妙詮なりとして詩をまなぶともがらにをしへ、唐の開元天平の代の体を月の団円なるになぞらへて、もとより美しといへども、また中唐晩唐の体の幽光をも捐ることなかれとしたる、心にくき心しらひにこそ。つれ〳〵草のこの件はわが国ぶりの髄脳なるを、かへりてここの歌よみは心つかずして、かしこのものしりに妙詮とさへいはれたる、ねたきわざならずや。

と語つたと述べ、芳樹は「まことにさることなり」と賛成して、巻二の次の段で「明月記」嘉祿二年四月七日の条に見える「郭公初声。但及二十餘声一頗無念」とある記事を引き、「あかぬかたなくとゝのほりおほからんよりも、事すくなにてにきびたらぬがあはれと思はるゝものにて、そのあはれより歌はいでくるわざにしあれば」この定家卿の詞と共に、兼好の詞は「まことに歌よみの為にはたぐひなき髄脳なりけり」と言つてゐる。優れた詩人であり教育者であつた淡窓が、兼好の詞から詩の髄脳を発見したことは、寧ろ当然であらうが、芳樹もまた淡窓の方法に共鳴したのであつた。然し淡窓が「開元豈不レ美。中晩勿二相捐一」といつて、一種の具体的な詩論を提出してゐるのに対し、芳樹は歌の一原理の想定に止つてゐる。そこにはやはり漢学者と国学者との相違も感じられ、また芳樹に確固たる歌論的立場のなかつたことも考へられるのである。

以上の例によつても知られるやうに、芳樹は歌の評論にあたつて、屢ば漢詩や詩論の類を引用し、時には儒者風な態度も見られるのであるが、巻二には近来の儒者が和歌に暗いことを言つた記事がある。その中で芳樹は太宰春台が和歌を詠んでも縉紳家には及ぶまいと考へて、自らの歌稿を焼いたといふことを述べ、これを「いふがひなきこと」と非難して、和歌は貴賤上下ひとしく詠むべきものであることを説いてゐる。それは春台が「独語」において少年時代

のことを回想し、「和歌を学びて縦ひ上手に成りたりとも、公家の人々を超ゆる事なるまじければ、いつも公家の下にかゞみなん事口惜し」と考へて、歌の反古を焼いて詩に志したことを述懐してゐるのを指すのである。然し、春台は後に歌の道を悟つたことを語り、「今、公家の人々、和歌の道を古にかへすべき事を思はずして、五百年来定家卿の教を守りて、道の衰へゆく事を知らず、至りて歎かはしき事なり」とも言つてゐるのであるから、春台が到達した思想に顔を背けて、少年時代のことを述懐した言葉のみを捕へ、これを責めて教訓がましい語を連ねる芳樹の態度は、故人に口のないことを幸とした独善的な議論といふべきであらう。芳樹は「あるおぞ人ふるき絵巻ものに、渡し守の烏帽子を著たるをみて、むかしは公家衆もかゝるわざし給ひけりといへる、太宰の論これにちかし」と結論を下してゐるのであるが、家蔵の坂井久良伎旧蔵本の「寄居歌談」では、この所に久良伎が朱で書き入れて、「乃公ノコトニハアラジカ」と冷笑してゐる。

四

「寄居歌談」に見られる注意すべき歌論として、「日本歌学史」や「大日本歌学史」などに挙げられた僅かな例の中にも、叙景抒情の論や喜怒哀楽四声の論が引かれてゐるが、それらは前述の通り、いづれも詩話を翻案したものであつて、たとひその数は少いにせよ、芳樹の歌論として目に立つものが、詩論の影響を受けて成つてゐる事実は、今改めて認めなければならないのである。しかも「寄居歌談」においては和歌の論評にややもすれば漢詩や詩論の類が引用せられてゐて、この書は近世の歌学書の中でも、詩論との交渉が深いものの一つに数えられるであらう。たゞ諸種の漢籍から詩評を引いてゐるのは、その内容が随筆的な雑纂であることに由るとともに、芳樹自身が和歌について一貫した明確な主張をもつてゐなかつたことや、最初に述べた如く、「寄居歌談」全五巻が、比較的長年月にわたつて成立したことにも基づくものと思はれる。然し芳樹の拠つてゐる詩論や詩評には、さすがに時代的な色彩が見られるのである。

江戸時代の漢詩の歴史は四期に区分することができる。第一期は慶長から貞享までの草創時代、第二期は元禄から天明に至る唐詩時代、第三期は寛政から文政までの宋詩時代、第四期は天保以後慶応に至るまでの清詩時代である。詩論の展開はこれに準じて大凡察すべきである。彼の地の詩話で江戸時代に翻刻せられたものは少くないが、その重なものについて見ても、右の第一期には、宋の魏慶之の「詩人玉屑」(寛永一六)、明の梁橋の「氷川詩式」(万治三)、宋の蔡正孫の「詩林広記」(寛文八)、明の胡応麟の「詩藪」(貞享三)などがあり、草創期にふさはしい内容を持つものが刊行せられてゐる。第二期になると、宋の厳羽の「滄浪詩話」、明の徐禎卿の「談芸録」王敬美の「芸圃擷餘」を合刻した「三家詩話」(享保一一)を始め、明の王世貞の「芸苑巵言」(延享二)、明の謝榛の「四溟詩話」(天明三)など、唐詩鼓吹の格調派の詩論が和刻せられた。第三期には先づ「全唐詩話」(享和元)が現はれ、次いで宋の楊万里の「誠斎詩話」(享和二)、呉可の「蔵海詩話」(同)が官版として刊行せられ、清の袁枚の「随園詩話」(文化元)、宋の欧陽脩の「六一詩話」、司馬光の「続詩話」、劉貢父の「中山詩話」を合刻した「宋三家詩話」(文化一三)、清の徐而庵の「徐而庵詩話」(文化一

四)、明の李沂の「秋星閣詩話」(文政一〇)、清の趙翼の「甌北詩話」(文政一一)など、宋代と清代との詩話が多く出た。第四期には、明の謝在杭の「小草斎詩話」(天保二)が複刻せられ、宋の陸游の「放翁詩話」(天保四)、清の王漁洋の「漁洋詩話」(同)、元の范梈の「木天禁語」(天保一一)などが翻刻せられたのであつた。これらの現象は、大体において各時期の詩や詩論の傾向を暗示するものである。

芳樹は享和元年五月に生まれ、長寿を保つて、明治十三年に歿した人であるから、右の第三期及び第四期時代に生存したといふことができる。「寄居歌談」には第三期の「随園詩話」や、第四期の「小草斎詩話」からの翻案が見られ、また清の沈徳潛の「国朝詩別載集」や「説詩啐語」などの詩評が引かれてゐる。「寄居歌談」における詩論の影響は、第四期時代的のものであると考へられるのである。「寄居歌談」と同じ時代に書かれたものに、大隈言道の歌論がある。わたくしは曾て言道の歌論には、広瀬淡窓の詩論の影響のあることを述べた。(註)。それはそれとして、今でも正しいと考へてゐるが、一方において言道の歌論には、芳樹の歌論と同じやうに、中国の詩論との交渉に関して、漢詩第四期時代のものであることを指摘し得る所があると思はれる。その問題をもここに論ずる予定であつたが、餘りに長くなるので、他日稿を改めて述べようと思つてゐる。

註　拙稿「大隈言道の歌論について」(「国語と国文学」昭和二六年一一月号)。なほ拙著「和歌史に関する研究」に補訂して収録。

— 大阪大学教授 —